

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵 深 主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三 日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我 等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 ん ぢ に き す。

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうぎなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのたあめ、および
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

【 復活のコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸

だいじんじなるしゅよ、なんぢははかよりふく
 大 仁 慈 主 爾 墓 復

かつつして、しせしものをおこし、ア
 活 死 者 興

ダムをふくかつせしめたまえり。エヴァはなん
 復 活 給 えり 爾

ちのふくかつをたのしみ、せかいのはて
 復 活 樂 世 界 極

はなんぢがしよりおきたるをいわう。
 爾 死 興 祝

【 日本の巫使徒ニコライのコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世 に、アミン。

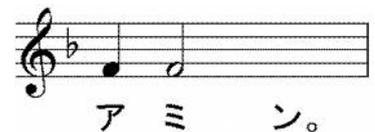
せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我
 くになんちをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんちははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知
 ひかりとあたたかきをながし、なんちのて
 光 暖 流 敵
 きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

司祭) (黙誦： せい なる 神、 せい しゃ の うち いこ、 セラフィムより せい さん の せい を 以て 歌 頌 せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、^{さんえい} 悉^{ことごと}くの天軍より伏拜せられ、^{てんぐん} 萬物^{ふくはい}を無より有と
 なし、^{ひと}人を爾^{なんぢ}の像と肖^{ぞう}とに依りて造り、^{しょう} 爾^よが諸^{つく}の賜^{なんぢ}を以て之^{もろもろ}を飾り、^{たまもの} 願^{もつ}う者に智慧と明悟とを與え、^{ねが} 罪^{あた}を行^{つみ}う者を棄てずして、^{おこな} 其^{もの}救^すの爲に痛悔
 を立て、^た 我等卑^{われらいや}しくして不^{ふとう}當^{なんぢ}なる爾^{しよぼく}の諸^こ僕^{とき}を、此^{おい}の時に於ても、^{なんぢ} 爾^{せい}が聖^な
 る祭壇^{さいだん}の光榮^{こうえい}の前に立ちて、^{まえ} 爾^たに當^{なんぢ}然^{とうぜん}の伏拜^{ふくはい}讚榮^{さんえい}を奉^{たてまつ}るに堪^たうる者と
 なしし主^{しゅさい}宰^{なんぢ}よ、爾^{われら}親^{なんぢ}ら我等^{われら}罪^{およ}人^{じゆう}の口^{じゆう}よりも聖^{つみ}三^{ゆる}の歌^わを受け、^{たましい} 爾^{からだ}の仁慈^{せい}と
 以^{もつ}て我等^{われら}に臨^{のぞ}み、我等^{われら}に凡^{およ}そ自由^{じゆう}と自由^{じゆう}ならざる罪^{つみ}を赦^{ゆる}し、我^わが靈^{たましい}と體^{からだ}と
 を聖^{せい}にし、^{われら} 我等^{しょうがいぜんこう}に生^{もつ}涯^{なんぢ}善^{つと}功^えを以^{たま}て爾^{せい}に務^むむるを得^えせしめ給^{たま}え、聖^{せい}なる
 生^{しょうしんぢよ}神^{こせい}女^{なんぢ}と古^{よる}世^{こび}より爾^なの喜^{しよせいじん}を爲^{きとう}しし諸^よ聖^{せい}人^{じん}との祈^{きとう}禱^よに依^よりてなり、)

司祭) 蓋^{けだしわ}我^{かみ}が神^{なんぢ}よ、爾^{せい}は聖^{われら}なり、我等^{こうえい}光榮^{なんぢ}を爾^こ父^{せいしん}と子^{けん}と聖^い神^まに献^{いつ}ず、今^よも何時^よも世^よ世^よ

に、



【 聖三祝文 】

せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う き 、 せ い なる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょう せいの ものよ、 われら を あわれ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なる じょう せいの ものよ、 われら を あわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 主日第8調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主^{しゅなんぢら} 爾^{かみ} 等^{ちかい} の神^な に 誓^な を作^{つく} して 償^{えよ} えよ、

しゅ なんぢら の かみに ちかいは な して つくの
主 爾 等 神 誓 作 償
えよ、

誦經) 神^{かみ} はイウデヤに^し 知られ、其^{そのな} 名^{おおい} はイズライリに 大^{おおい} なり、

しゅ なんぢら の かみに ちかいは な して つくの
主 爾 等 神 誓 作 償
えよ、

誦經) 主^{しゅなんぢら} 爾^{かみ} 等^{ちかい} の神^な に

ちかいは な して つくの えよ、
誓 作 償

【 アポストロス 使徒經 285 端 ティモフェイ書 4 章 9～15 節 】

司祭) 睿^{えいち} 智、

誦經) 聖^{せい} 使徒^{しと} パヴェルが^{たつ} ティモフェイに^{ぜんしよ} 達^{よみ} する 前^{ぜん} 書^{しよ} の 讀、

司祭) 謹^{つつし} みて^き 聽^き くべし、

誦經) 子^こ ティモフェイよ、此^こ れ 信^{まこと} なる 全^{まった} く 受^う く べき 言^{ことば} なり。蓋^{けだし} 我^{われ} 等^ら は 此^{これ} が 爲^{ため} に 勞^{ろう} して 謗^{そしり}

を受^う く、乃^{すなわ} ち 活^な ける 神^{かみ} に 望^{のぞ} む あり 因^よ りて なり、彼^{かれ} は 悉^{ことごと} く の 人^{ひと} 、特^{こと} に 信^{しん} 者^{じゃ} の 救^{きゅう} 主^{しゅ} な

り。爾^{なんぢ} 此^{これ} 等^ら の 事^{こと} を 戒^{いまし} め 且^{かつ} 教^{おし} えよ。人^{ひと} 爾^{なんぢ} の 年^{とし} 少^{わか} きを 以^{もつ} て 輕^{かる} ん ず べから ず、乃^{すなわ} ち 爾^{なんぢ}

言^{ことば} に、行^{おこな} い、愛^{あい} に、神^{しん} に、信^{しん} 仰^{こう} に、潔^{けつ} 淨^{じょう} に 於^{おい} て、信^{しん} 者^{じゃ} の 模^も 範^{はん} と 爲^な れ。讀^{とく} 書^{しよ} と、勸^{かん}

諭^ゆ と、教^{きょう} 訓^{くん} とを、務^{つと} めて、我^わ が 來^{きた} るを 俟^ま ち。爾^{なんぢ} に 在^あ る 恩^{おん} 賜^し 、預^{よげん} 言^よ に 由^ち りて、長^{ちやう} 老^{ろう} の 按^{あん}

しゅ もつ なんぢ さづ もの ゆるかせ なか これら こと しねん もつば これ つと
 手を以て、爾に授けられし者を 忽にする勿れ。此等の事を思念し、専ら之を務め
 よ、爾の上達が衆に顯れん爲なり。

(比較用 口語訳) 子テモテよ、これは確実で、そのまま受け入れるに足る言葉である。わたしたちは、このために勞し苦しんでいる。それは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである。これらの事を命じ、また教えなさい。あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。わたしがそちらに行く時まで、聖書を朗読することと、勧めをすることと、教えることとに心を用いなさい。長老の按手を受けた時、預言によってあなたに与えられて内に持っている恵みの賜物を、軽視してはならない。すべての事にあなたの進歩があらわれるため、これらの事を実行し、それを励みなさい。

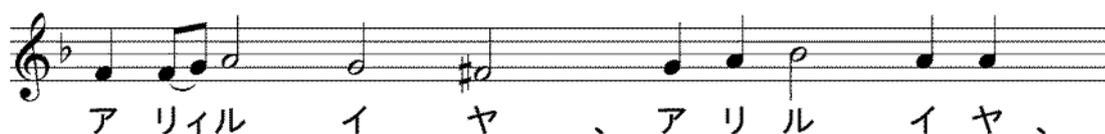
【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

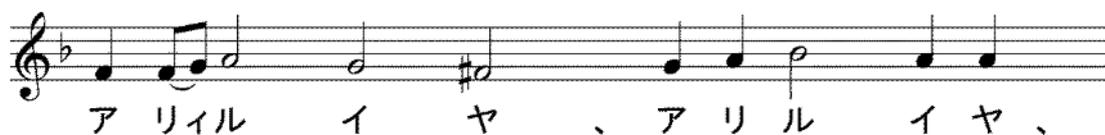
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



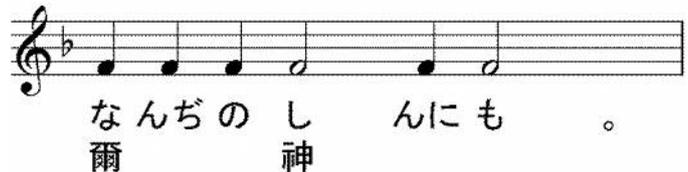
誦經) ^{さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ} 讚揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、



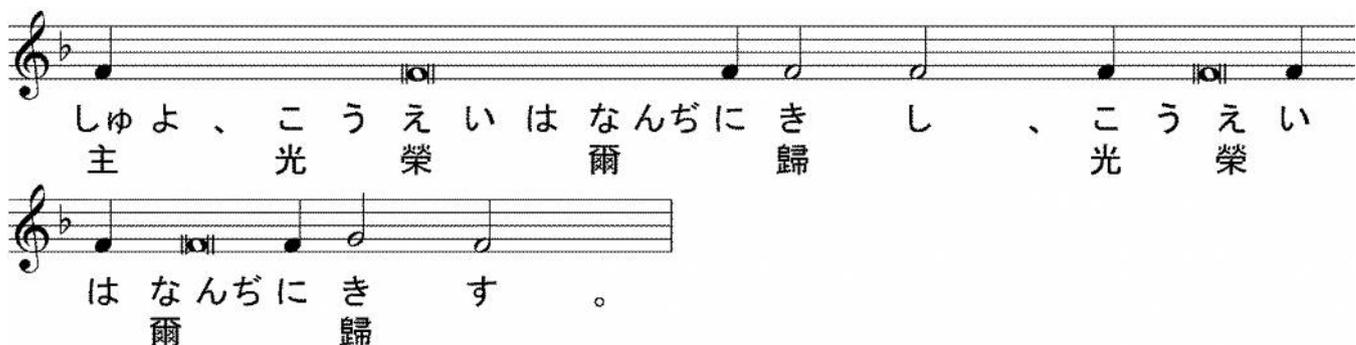
司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を
 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書94端 19章1~10節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス イェリホンに入りて過ぎ行けり。視よ、ザクヘイと名づく
 る者あり、税吏の長にして富める者なり。イイスの如何なる人たるを見んと欲したれど
 も、人の衆きに囚りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。乃趨り前みて、彼を見ん

ため いちじく のぼ かれこ かたわら す こ ところ きた とき
爲に無花果樹に升れり、彼此の 旁 を過ぎんとすればなり。イエス此の 處 に來りし時、

あお これ み い すみやか くだ けだしわれこんにちなんぢ いえ やど
仰ぎて、之を見て曰えり、ザクヘイよ、 速 に下れ、 蓋 我 今日 爾 の家に寓るべし。

かれいそ くだ よろこ う ひとみなこれ み うら い くれゆ ざいにん
彼 急ぎ下り、喜 びてイエスを接けたり。人 皆 之を見て、怨みて曰えり、彼 往きて罪 人

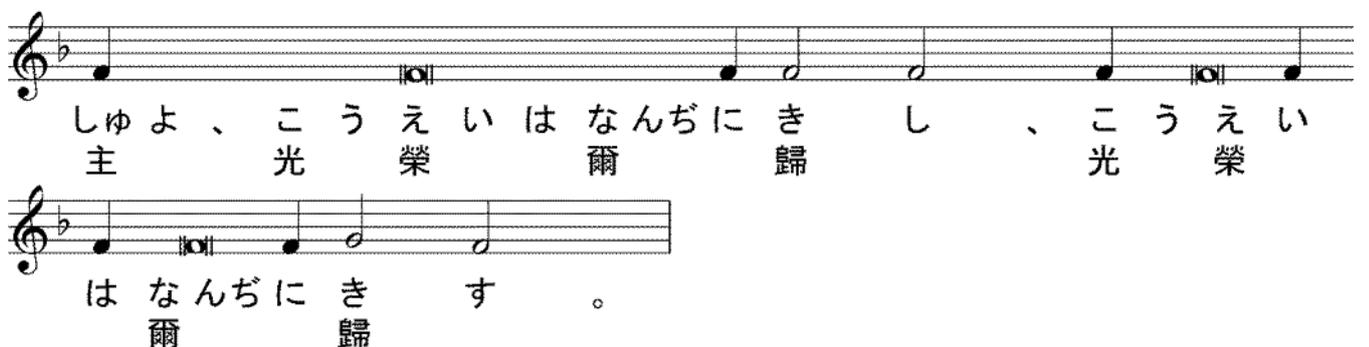
きやく な た しゅ い しゅ われしよゆう なかば もつ まづ もの
の 客 と爲れり。ザクヘイ立ちて、主に謂えり、主よ、我 所有の 半 を以て、貧しき者に

ほどこ も し ひと と しばい これ つくの くれ い
施 さん、若し誣いて人より收りしことあらば、四倍にして之を 償 わん。イエス彼に謂え

こんにちすくい こ いえ のぞ こ ひと こ けだしひと こ ほろ
り、今日 救 は此の家に臨めり、此の人もアヴラアムの子なればなり。 蓋 人の子は亡び

もの たづ すく ため きた
し者を尋ねて救わん爲に來れり。

(比較用 口語訳) イエスはエリコにはいつて、その町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は取税人のかしらで、金持であった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見るができなかった。それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。そこでザアカイは急いでおりてきて、よろこんでイエスを迎え入れた。人々はみな、これを見てつぶやき、「彼は罪人の家にはいつて客となった」と言った。ザアカイは立って主に言った、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」。イエスは彼に言われた、「きょう、救がこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから。人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ